

歯科治療と麻酔の歴史

——絵画を中心に——

別部 智司

歯科の治療と麻酔の歴史に関係する絵画を中心に、変遷と考察を加えて報告した。今回選定したものは絵画が22、図が12、写真が5であった。歯科の歴史は近代まで、抜歯の歴史であった。また、麻酔の歴史でもあるとって過言ではない。以下、その代表的な絵画について説明を加える。

Odontagra 写真：ギリシャ時代（B.C. 800~338）の抜歯鉗子。アリストテレスがOdontagraについて書いている。鉗子で歯を動揺させた後に、指で抜き取る事を考えた。

聖アポロニア（Saint Apollonia）：1つ目はローマ皇帝デキウス（Decius, A.D. 201~251）に逆らったキリスト教徒の見せしめにアレキサンドリアの老女アポロニアは抜歯の拷問を受けた後に、自ら刑場の火の中に身を投じたといわれる。249年にローマ教会より聖列に加えられた。2つ目は聖アポロニア像（作者不詳）1470年、中世・ルネッサンスを通して、うら若い女性として描かれ、殉教の印である棕櫚の枝と、歯を挟んだ鉗子を手にした姿で登場する。

18世紀のペルシャの抜歯、絵画：上下の文面はコーランの文面で「抜歯の際には優しく処置しなければいけない」と説かれている。イスラム王国（A.D. 570）時代はメッカにてマホメットが生まれ、7世紀初頭にコーランと剣を掲げてアラビア兵を率い、1世紀の間に大サラセン帝国を作り上げた。

Ambrois Paré（1510~1590）フランスのBarber surgeon 図版：1536年イタリー戦後、フランス軍医としてドイツ軍と戦い、フランスの外科を世界最高の地位に導いた。虫歯を削る道具、スクレーパー、歯を押しだす為の鉄製押し棒、ペリカンと鉗子にて抜歯する図などが挙げられている。

der Zahnarzt 絵画：ライデン作、フランドル、1523

年、最古の歯抜き人の絵画として知られている。

スコットランドの外科医 Benjamin Bell 著 System of Surgery, Vol. 4 図版：最初の歯鍵の記事について紹介した。

Transplanting of Teeth, Thomas Rowlandson 作, 1790年（英国）、色彩銅版：作者ローランドソンはイギリスの風刺画家。この絵は当時行われていた歯の移植を描いている。貧しい患者はわずかなお金のために健全な歯を抜かれ、裕福な患者に移植される様子を滑稽に描いている。

サテュロス「夜」、ホーガス著、英国、1768年、銅版：1日の移り変わりを描いた4枚の連作版画の「夜」。ロンドンのチャリングクロス通りの夜景で、窓から客の髭を剃っている姿が見え、窓の上には看板が架かっていて、「ひげ剃り、瀉血、抜歯は即座に」とあり、Barber surgeonであることが判る。

The passions, humourously delineated, John Collier, 1708-1786, pseud. Timothy Bobbin 著 ロンドン、1810年刊、彩色銅版図：Acute pain, Laughter & experiment, Fellow feeling の3画を紹介。人間の内面にある好奇心を抜歯という行為を通じて皮肉って表現している。

ドクター・アイゼンバルトと患者、J. Schneider 作、ドイツ、1826年彩色リトグラフ：藪医者アイゼンバルト（1661-1727）は着飾り、ポケットからは注射器や不気味な薬瓶がはみ出て、大きな鉗子で抜いた歯を見つめている。患者は腫れた頬に湿布をして、痛みと恐怖に耐えている構図である。

きたいなめい医、歌川国芳、1853（嘉永6年）絵画：おかしい迷医と言う内容である。例えば「歯の痛むというものは、なかなか難儀なものでござる。これは残らず抜いてしまっ、上下共総入歯にすれば一生歯の痛む憂いはござらぬて」

「これはなるほど良い御療治でございます」などの問答が描かれている。

麻酔の歴史ではB.C. 5000~2500にヒヨス、マンドラゲ、ケシ、コカを用いた局所作用から1943年に塩酸リドカイン合成までを紹介した。以下はその中からの抜粋。

バビロニアの楔形文字の記録B.C. 5000~2500
写真：人類が人体に薬を用いた最初の記録とされる。ヒヨスの粉を齶窩に詰めると除痛すると記載されている。

歯科医H. Wellsの笑気ガス麻酔、「外科の夜明け」より：ウェルズの診療所で彼が笑気ガスをすってぐったりして臉が閉じ、助手リグズが抜歯鉗子を掲げている光景。この時は成功したが、1845年マサチューセッツ総合病院(MGH)の手術室での公開抜歯術では、患者が悲鳴をあげたため「インチキ」と評価され、屈辱に苛まれ、後に自殺に至った。

歯科医W.T.G. Mortonのエーテル公開手術1846年10月16日絵画：今回はMGHのエーテルドームに飾られているものと、外科の夜明けに掲載されているものを対比した。それぞれ左右から描写されているので、患者の体位やモルトンの麻酔、外科医の手術時の格好などが詳細にわかる。

歯科の歴史は痛みとの戦いの歴史であり、これに対処する麻酔の歴史でもある。ボストンにあるモルトンの記念碑には「吸入麻酔法を創案し世に知らしめた人。君が現れる以前は常に手術は苦悶そのものであった。君により、手術の疼痛からのがれ、疼痛は去った。君が現れてから、科学は痛みを征服している。」と書かれている。今回の絵画を通じて、時代の背景とともに、歯の痛みの捉え方と麻酔による疼痛除去法の歴史が垣間見られたことであろう。

(平成19年12月例会)

魯迅が『藤野先生』に書かなかったこと

坂井 建雄

魯迅の『藤野先生』は、仙台医学専門学校の解剖学教授、藤野厳九郎から授業ノートの添削を受けた学恩を記し、その人格を称揚する作品である。2005年末に北京の魯迅博物館から授業ノートのデジタル画像が供与されて、魯迅の仙台時代についての研究が大きく進展した。

魯迅の授業ノートは6冊からなる。①解剖学総論・骨学・靭帯学・筋学、②血管学・神経学・局所解剖学、③組織学・生理学、④感覚器学・内臓学、⑤病理学、⑥有機化学、である。①は、敷波教授と藤野教授の担当で最初の2ヵ月のノートである。②は藤野教授担当で2ヵ月以後、④は敷波教授担当で2ヵ月以後の解剖学、③の組織学は敷波教授の担当である。魯迅の授業ノートを分析して明らかになったことがいくつかある。藤野教授による赤字の添削は、②のノートにのみ見られた。添削ではおもに書き落とした語句が補充さ

れ、文法と修辭が訂正されていた。また解剖学的内容についての注意書きもところどころに見られた。添削は血管学の冒頭から始まり、1年次後半の神経学、および2年次の局所解剖学でも続けられたが、最後の1ヵ月半ほどの部分には添削がなかった。

『藤野先生』では、書き落としたところがすべて埋められていたばかりでなく、言葉遣いの誤りまで、いちいち訂正してあったと描かれているが、その通りの添削が実際に行われていた。また藤野教授から前腕の血管の図で枝の描き方が間違っていると注意を受けて、魯迅は口でははいと答えたが、内心は承服しなかったと描かれている。それに対応すると思われる注意書きが授業ノートに見られる。後頸部の図では、「此の図中訂正すべきもの数多あり」という全般的な注意書きがあり、その2週間ほど後の大腿前面の図では